図書館通信 110

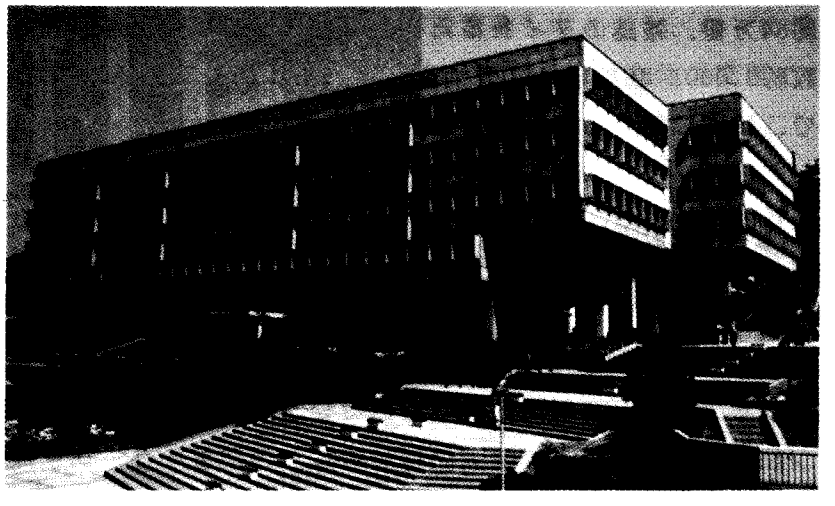
○静岡大学附属図書館○

ソウル旅行断想

鈴木英夫

気象台開設以来の猛暑の連続といわれた今年の夏、円高の追い風もあって百万人を越える日本人が涼を求めて海外に脱出した。小生も6年ぶりにパスポートを取得したのでさて何処に行こうか考えた末、結局日本から最も近く、かつ費用も安く、手近に外国旅行の雰囲気を味わえるところとなると韓国にしくはないと思い到った次第。時あたかも北朝鮮核疑惑問題がもち上り、もし朝鮮半島に有事が発生すれば、当分その機会が失なわれるかも知れないなど、少々早とちりの想念が頭にあったのかも知れない。今回の旅行はあくまでも休暇を取っての観光旅行ではあったが、日程の最後の日にソウル国立大学と私立の延世大学を訪問し、その図書館を見て来たのでその印象を記してみたい。

ソウル国立大学は1946年の創立となっているが日本統治時代の京城帝国大学を含めれば韓国では最も伝統ある大学で、韓国社会におけるその影響力は日本における東大をはるかに越えると云われている。旧帝大時代よりの旧市街にあった大学ごと医学部病院を除いて、そっくり現在地(地下鉄2号線〔東京の山手線、大阪の環状線のようにソウル市内を円型のように循環する線〕のソウル大学入口下車)のKwanak地区に移転したのは1975年のことであり、それを機に14あった部局図書館室を、キャンパスが離れている医・農を別にして、すべて中央図書館一本に集中化した(法学部のみは同じキャンパスの中に独立の図書館を持っている)。15学部11研究所を有する総合大学で教官数約1,600、学生数約25,000で学生数に比し教



ソウル国立大学中央図書館全景

官数が多いのが大きなメリットのようである。分館を含めた蔵書冊数は約163万冊で日本の国立大学で比較すれば、いわゆる旧六(岡山大、金沢大等)規模である。

情報管理課の司書事務官(日本の係長の相当)高氏と日本語の大変上手な司書の洪嬢の案内で1階の閲覧室から旧京城帝大の蔵書が収蔵されている6階の書庫まで、見せてもらったが、全体的に米国の大学図書館の制度をとり入れた、利用に十分配慮した図書館の印象を受けた。例えば座席数も4,143と非常に多く、パートタイマーも含めて130人近くいる職員のかなりの人員を閲覧スペースの勤務に配置しており、開架図書が約70万冊とのことであるから本館の蔵書約128万冊の57%はオープンアクセスである(製本雑誌のバックナンバーなどもその中に含まれている)。雑誌のタイトル数は約9,300、最近はニューメディアによるサービスにも力を入れCD-ROMによるデータベースも16種を保持している。電算化は1990年より始まり、キャンパスランによるOPACサービスも始まっている。遡及入力にも熱心で情報管理課の中に一掛をつくり、日常業務を通して行っている。

延世大学は高麗大学と並んで韓国の私学の雄として、日本の早慶にたとえられる程の名門校で、創立は1885年と古く、17の学部を持ち、学生数は3万を越えるマンモス校である。キリスト教の学校らしくキャンパスもモダンで、ヨーロッパ風である。金閲覧課長とUCLAで半年研修を受けたという英語の達者な蔡嬢の案内で一通り館内を案内してもらった後、貴重書室で韓国の国宝級の図書、古文書を拝見した。その中には宮廷音楽の雅楽の楽譜(西洋音楽の五線譜とは異なる)などもあり、大変興味深く感じた。電算化について云えば、OPACはYOURS(Yonsei University Retrieval System から取られている)と称しているが、まだデータが少なくカード目録が重要な役目を負っているようである。この図書館は蔵書約84万冊、雑誌のタイトル数約9,000、職員数は71名で、韓国における大学図書館としてソウル国立大学についで第2位とのことである。この図書館も開架図書の比率が高く閲覧スペースが広い、明るい雰囲気の中を多くの学生が真剣に勉強している姿が印象に残った。

延世大学学生会館

なお今回の初めての韓国旅行で感じたことを二つ。ソウルオリンピックを契機とした韓国経済の躍進については日本のマスコミでも大きく取り上げられているので、知っているつもりではいたが、実際にこの目でみて改めて驚いた。高層ビルが林立するソウルの街を清潔でカラフルな服装をしたヤングが闊歩する姿は東京の原宿などと余り変らない。顔つきや身体、しぐさには我々と違いはないので、異なるのは言葉だけということになる。ところが同じ漢字文化圏と理解していた小生には、昨今の韓国の漢字ばなれの

スピードには戸惑うことが多かった。街の案内、お店の看板、これすべてハングルのオンパレード。おまけに英語や日本語が思った程通じないので、通りがかりの人にたずねても答えは返ってこず、路上で立ち往生することがたびたびあった。

しかし、物価が安く、治安がよく、かつ風俗習慣が我々と近しい韓国は是非お勧めしたい。少々ハングルを勉強のうえ出かければなおよろしい。（事務部長）

浜松分館から

■ 浜松分館のこれからの課題 ■ 塚本雅美 ■

ここ数年間は、静岡大学にとって大きな変化の時期になりそうである。ということは大小はあっても各部局でも変化するということであり、当然、附属図書館もそうである。

浜松キャンパスでは今年度10月には、工学部の学科改組があり、工業短期大学部の教官が工学部の所属となり、5つの学科として新たに出発している。この後も夜間主コースの設置、新学部設置が準備されつつある。

図書館通信108号に、附属図書館の自己点検評価に沿って事務部長が5つの課題を紹介している。それらの課題について、浜松分館の現況とともに見てみたい。

工業短期大学部は本年最後の学生を迎え入れたが、平成8年度を最後に廃止となる予定である。従ってその図書資料は、図書館に移管されることとなる。具体的には浜松分館に受入れされるが、これで分館の蔵書は現在の15万冊から20万冊近くになる。(これは研究室にある分を含めての冊数なので、実状とはずれがあるが)分館の収納可能冊数は17万冊と試算されているので、多分、すべての書架を満杯にしても収まりきらないだろう。工業短期大学部の図書の配架場所は、その学生も在籍するので、当分は現状のままとなろう。さらに、学科改組で教官数が増加し、新学部設置後を考えると、年々の増加冊数は雑誌を含めて、現在の約2倍位になると予測される。要するに入れ物の問題である。それも単に書架だけがある、いわば倉庫としての機能を持つだけでは図書館として機能しない。

図書館の機能として、一般的に図書館資料の収集、整理、保存、利用があげられるが、最終的には利用者が図書館資料を快適に利用できる状態をつくりだすことである。極端にいえば、利用できない資料は、いくら収集、整理、保存しても図書館資料とはいいがたいということになる。

量的な増加は、単に物理的な入れ物だけにとどまらない。収集、整理といった処理の増加も当然生じてくる。と同時に、その対応のための予算、人員の確保といった問題に突き当たる。量的な問題の量的な対応には限界があるので基本的な発想の転換にもとづく方策が必要となるだろう。

図書館はまったくの新しい出発が容易にできない。過去に収集した資料を利用のために整理保存してゆかなければならないからだ。例えば、図書館の電算化を検討している時、一番問題となったのは過去の目録データをどうするかであった。また、図書には検

索のために分類が付与されているが、分類法は学問の進歩や新知識によって絶えず変化を余儀なくされる。しかし、分類法や分類体系を替えるためには、過去の資料をどうするかが常に問題となる。このような観点から、図書館はいつも過去を背負っているといえる。学科改組や新学部設置等があった場合、図書館も大きな影響を受けるのである。

新学部設置後を想定してサービス面から対応を見てみる。まず、利用対象者の増加があるが、これは単なる増加ではなく、様々な利用者が増えることでもある。浜松分館は現在まで浜松キャンパスにおいて分館としての機能とともに工学系の学部図書館あるいは専門図書館的な意味合いをもった図書館として運営されてきている。それは、毎年受入れ図書のほぼ80%近くが理工系資料から構成されていることでみてとれる。主要な利用者も浜松キャンパスの工学系の教官・学生であった。新学部設置後は、使用される資料や、求める資料・情報も変化していくであろうし、図書館もそれに対応していく必要がある。少なくとも現在のままでは支障がでて来るであろうことは容易に推測される。学部図書館あるいは専門図書館的な役割から総合図書館的な役割を果たすことが求められてくるものと思われる。

利用者に直接対応して行われるサービスも、資料の充実とともに、変化していくことが予想される。ひとつは利用者の増加である。これについては施設面でサポートする必要がある。閲覧、貸出、レファレンス、情報検索といった館内でのサービス体制をはじめとして、文献複写、相互貸借といった対外的な図書館間相互利用を基盤とするサービスも増加するであろう。理工系を主要対象とする文献を主として扱ってきた分館にとって、人文社会系の文献はその体系も取扱も異なるため不慣れな分野といえる。館員は自己研修を要求されることになるであろう。

以前から図書館は図書館間のネットワークを持っていて、相互貸借や文献複写を行ってきている。その手段は郵便であったし担当者も兼任であった。現在では、学術情報ネットワークによって国立大学の図書館はもとより多くの公立・私立大学図書館、さらには研究機関が結ばれていて、貴重なサービスを行っている。近い将来はすべての図書館が何らかのネットワークで結合されるのではなかろうか。

こうしたネットワークをひろげることは、生涯教育とか大学の開放といったことと相まって、今以上に学外からの大学図書館への要望が強められてゆくであろう。こうした要望にどのように対応してゆくかも、これからの課題のひとつである。（管理運用係）

■ Desk Side にて／文献複写担当者より

今年度――1994年4月より私たちの浜松分館もILL(コンピュータによる文献複写・図書の相互貸借)System に仲間入りをしました。右も左も分からぬ担当者2名と講習会で研修済み――免許皆伝者1名の怪しげなる3名からの出発でした。操作マニュアルを手渡されたが、さあどうしましょう。何が何だかわからない略字の羅列で、またもや困惑。一通りの説明をきいて、さあ、In-Put。「エート」「アレ」「どうしよう、動かなくなってしまった。」等々。マスターするのに約3カ月。やれやれ、やっと軌道に乗りました。申

込者の方々には大変御迷惑をお掛けしました。現在は、スムーズに流れています。

で、担当者からのお願いがあります。それは申込者の方々の字が読みにくくて(御免なさい。)何しろ老眼になりつつある担当者、申込者は若者多数、さて、このギャップを何としよう。すいませんが**大きな字**でわかりやすく書いて下さい。それと、誌名(書名)、ページ、発行年は忘れずに書いて下さい。最近はレポート類が多く、能力不足も禍して所蔵の検索が難しいため、国会図書館へレファレンスをお願いしたり、業者(主にJICST)に依頼したりで、時間と思わぬ高額料金を請求されることがあり申し訳ない結果になってしまい気にかかっております。

ILL-Systemを導入してからの利点としては、いつでも送信が出来ること(郵送では1日1回3時の発送)、受付館で欠号・所蔵不明である場合でも予備館を指定しておけば、処理してくれるので、今までよりもより早くお渡し出来ることを嬉しく思っています。(生の声は聞いていませんが。)受付担当者も他大学から1日20~30件の依頼があり、**嬉しい悲鳴**をあげています。問題点もありますが、徐々に改良されていくと思われますので、私共は期待を持っています。御意見・苦情がありましたならば、カウンター(担当者)にお申し出下さい。お待ちしています。

◎ インターネットを使う ◎

前号の「ワイキキの図書館」のレポートでは、ハワイの各家庭からパソコンで図書館にアクセスできる、とあったが、本図書館からはハワイ大学の図書館の目録にアクセスすることができる。インターネットを使ってである。

このたび、情報処理センター分室の協力を得て、本館内の3050でMosaicが使用可能となり、今や職員の内の何名かはインターネット漬け。その結果、判明したこと――①インターネットは無料とのことだが、実は、お金がかかる(アクセスの範囲が拡がるのでそれまで知らなかった文献・図書等が判明し、その複写料金や購入費がかさむ) ②ＷＷＷを使ってもアクセスの自由度は拡がらない(ハイパー・テキスト、Gopherと驚くべき自由さでデータの大洋を航海できるが、アクセス・ポイントの余りの多さ由、検索を重ねる程に、検索者が興味を持つ点に収斂してしまうことが多い。T君だとSFに、Mさんだと映画にである)。

ハワイ大学だけではなく、米本土の数多くの大学図書館の目録にアクセスできるし、それどころか全世界の多くの図書館にもアクセスできる。UnCoverという約15,000の雑誌の目次索引も覗くことが可能。更に、Jリーグの結果を知ることもできるし、新日本プロレスの所属レスラーの系譜さえ分かる。前者を維持しているのが東大内のサイトというのは理解できるが、後者のそれがアメリカにあるというのが、スゴイ――――インターネットに触れてみたい、という方は学術情報係にお問い合わせ下さい。 (学術情報係)

ドイツの図書館・文書館を訪ねて

居城　弘

はじめに

昨年度、関係各位のご尽力によって、本学附属図書館に大型コレクションとして「近・現代ドイツ経済・統計研究資料集成」の受け入れが実現した。その内容およびその資料的な価値についての紹介に関しては、既に本誌85、100号に詳細が掲載されている。

今回、受け入れられることとなった文献・資料がドイツの大学図書館において、社会科学の研究にとっての第1級の価値を有するものとして位置付けられていることは、実際に、ドイツ各都市の大学をたずねたときにも確認できたところ。例えば、ケルン大学の図書館では、これらの資料が創刊号から最新号まで完全な開架方式で自由に利用できるように完備されていた。それによって過去100数十年間の社会経済問題研究の基本的な流れをフォローすることが可能な訳で、誠に素晴らしいシステムと感心した次第であった。今回の「近・現代ドイツ経済・統計研究資料集成」が、広く学内外の研究者や学生によって利用されるように期待したい。

充実し、かつ市民に開かれている図書館・文書館

今回、6カ月間の在外研修で、ケルンを拠点にしてドイツ各地の大学及びさまざまな機関の図書館・資料館を訪れる機会が与えられた。そこで筆者の経験した限りでの《ドイツの図書館事情》について述べてみたい。わたしの研究テーマは「ドイツの金融・銀行システムの歴史的展開」であり、19世紀の産業革命期から、第一次大戦までの国際金本位制の時代について、ドイツの産業的発展の中心であるライン・ウエストファーレン地方の各地の図書資料館を調べることが主な目的であった。実際に訪れることができたのは、各地の大学図書館のほか、地域の州立や市立の公共図書館・資料館、それから主要都市にある商(工)業会議所の図書館、及び世界的に著名な「銀行史研究所」(フランクフルト)などであった。そのほかに銀行附属の資料館などにも訪れる機会があった。この中で、大学図書館以外では、公共図書館・資料館の充実ぶりにはとりわけ感銘深いものがあった。例えば「ケルン市立歴史資料館」の場合で言うと、中世以降のケルン地域に関する社会・文化史の資料を所蔵し、専門の研究者を含む40数名の資料館員を擁し、詳細な所蔵目録の他に定期的に資料展示が企画されかなりの市民の来観者が展示に見入っていた事を思い出す。歴史的な資料が市民からの寄贈によって、散逸を防ぎつつ蓄積されて行くのだそうである。ここでは、ケルン市の歴史と産業ブルジョワジーの指導者ハンゼマンに関する資料を見ることができた。また、経済、産業、企業に関する資料館としては、ケルンの駅から金融街に向かうウンターザクセンハウゼン通りの古めかしい建物にある「ラインウエストファーレン経済史文書館」と「ケルン商業会議所図書館」をしばしば訪れライン地方の銀行の生成に関する資料に接することができた。この地方だけでこうした図書・資料館が、ケルンのほかにデュセルドルフ、ドルトムント、エッセン、ボッフムなどの主要都市に整備されていたが、6カ月の滞在期間中にそのすべてを訪れる

ことができなかったのは実に心残りであった。それぞれの資料館を支える専門的な学芸員、ライブラリアンの努力には頭の下がる思いであった。歴史的資料を尊重する態度とそれを支える専門的な研究者と図書館職員の充実した体制のもとで運営され、利用者に対する親切な説明、利用方法、利用者がどの資料を求めているかなどの相談に乗ってくれる。多少込み入った事柄になると専門分野の研究者や別の資料館をおしえてもらうこともできた。特に、その利用について、極めてオープンであること、そのことが当然の事としてどこでも徹底していることに感銘を受ける。一般市民、学生の利用者の多かったことも印象的であった。聞けば、論文の作成のために各地の資料館を回っているのだと言う。このような研究条件が広く研究の志をもつ人には、紹介状などなくてもだれに対しても提供されているのは誠にうらやましい限りである。

ケルン大学中央図書館について

ケルンについたのは3月の末、まだ寒い風のなかであったが、レンギョウの花がちょうど満開のころであった。新しい夏学期の始まらないうちから、図書館は学生で満員の状態であった。授業やゼミのための参考文献を先を争うように探したり、コピーをするもの、カードボックスを操るものあり、CD-ROMを操作するものなどでゴッタ返していた。大学図書館としてはどちらかと言えば質素な感じさえする館内には、講義に関連する参考書などを中心に備えられた学習用図書室の他に、かなり大きな一般用閲覧室(レーゼザール)、定期雑誌や新聞閲覧室、それから階段のうえにはびっくりするほど広い情報・カタログ検索室とがあった。一般閲覧室は、専門分野毎に書架やロッカーなどで簡単な仕切りがされて居て、それぞれの領域の基準文献や各種の辞典、統計、年報、法令判例集、議会議事録その他の参考図書類がすぐそばでいつでも利用できるように配架されていてとても便利であった。わたしはこの閲覧室で学生と文字どおり肩をならべて勉強することにした。そこには学生のほか一般市民や、民間の研究者などのさまざまな年齢職業の人や、ベビーカーを押した子供づれの人などが分厚い文献資料を借り出して学生に交じって仕事をしていた。カタログ検索室には実にいろいろな分類基準のカタログ(あの膨大なキール・カタログももちろん含まれる)があふれるくらい集められていた。なかでも事項別カタログは実に便利であった。この部屋には、文献に関する相談に乗ってくれるベテランの職員がいて、検索の方法について丁寧な説明がなされる。

いくつか印象的であったことを述べると――①利用者資格についての規定が明確に定められ、学生教職員の他に、地域住民やわたしのような外国人にも、調査や研究の目的のための図書館の資料の利用が全くオープンであった。身分証明書あるいは住民証明書の提示によって、利用者登録Anmeldungが行われると、すべての利用者が貸出冊数に制限はなく、4週間の館外貸出ができる。大きなコンテナ持参で借りて行く学生もいた。ただ返却期限を越えた場合、督促のはがきが来て一定の手数料(罰金ではない)の支払が求められる。中には数十マルクも請求されている人もいたが、そのことで、不平や苦情めいたことは言わないのがいかにもドイツらしいところである。しかも利用者によって異なった対応がされないこと、利用者がすべて同一の利用条件であることなど我が国の実態と比べて考えさせられる。

②図書館の利用案内が色分けされた20枚ほどのパンフになっていて、利用者は自分の必要に応じてそれの説明によってほとんどの問題が解決するようになっていた。貸出の手続と貸出の方法は、館内のいろんな場所に設置された端末を使って検索と貸出の予約ができた。端末の操作は、利用者番号と暗証番号、それに読みたい文献の登録番号を入力するだけであって慣れてくると極めて簡単なシステムである。端末による検索と貸出の予約がすむと、請求後1、2日後に貸し出しを受けることができる。このやり方は一見すると不便なようだけれども、よく観察するとなかなか合理的である。利用者から見ると即座に必要な本が借りられるほうが便利なように思うが、書庫の中の本を探してくる間の待ち時間を節約できることと、閲覧係の職員の仕事の内、窓口業務と貸出返却本の書庫との往復(ベルトコンベアによる)業務のための時間配分がはっきりしていて、窓口業務の閉鎖時間中に書庫から本を探して来て貸出用の棚に並べられるというやりかたがとられていた。そこで、1、2日後には利用者カードの提示によって迅速に貸出を受けることができるという訳である。

③コピーのこと———図書館にはさまざまな場所にコピー機が10数台設置されていて、1日中フル回転の状態であった。文献の複写については、日本以上に利用されているように感じられた。大学の周辺には、コピーサービスの店がたくさんあって学生であふれている。ドイツの学生が本を買わないでコピーで済ませているというわけでは必ずしもなく、教科書以外の参考文献をせっせとコピーしているのである。しかも興味深かったのは、ほとんどすべてのコピーが拡大・縮小されてA4サイズで統一されていることであった。そのコピーがさらにA4のファイルにきれいに綴じ込まれる。文書の規格化の徹底ぶりには驚くばかりであった。また著作権の保護についての対応については詳しくは判らないが、そのような配慮が利用者の便宜と抵触はしていないことだけは事実であった。それともうひとつは、コピーによる破損がかなり見られたことである。わたしの利用した文献の中にも、もはやコピー不能の状態まで破損しているものがかなりあって、写真撮影でないと無理なものも多かった。修繕を重ねながらぎりぎりのところまで利用の便宜を追求するというのがこの国のやり方なのかもしれない。

利用者の立場から見て、ドイツの図書館の使いやすさは、図書館がかくあって欲しいという望みに、与えられた条件の中で、十分にこたえているからであろうと痛感したしだいである。

(©Hiromu Ishiro:人文学部・財政金融)

冬期休暇中の貸出期限の延長◎１２月１日（木）から１月１０日（火）の間の貸出図書の返却期限は１月１８日（水）とします。

年末・年始の休館◎１２月２３日（金）から１月４日（水）まで

※なお、12月21日(水)から1月10日(火)の間、夜間及び土曜日開館はありません。

静岡大学附属図書館報「図書館通信」 第25巻3号(通巻110号) 1994年12月 9日
発行所 静岡大学附属図書館 〒422 静岡市大谷836 ☎ 054(237)1111
印刷所 (株)黒船印刷
©1994 by Shizuoka University Library